

社会事業学部時代の思い出

大槻 たか

私の故郷は仙台から南20キロの地で阿武隈川に沿った角田町といい、明治・大正時代は藪の集散地であった。角田町から東京に行くには、小さい馬車で汽車の着く槻木^{ツキキ}という駅に出て汽車に乗り上野駅まで12時間あまりかかった。いまは新幹線とバスを使い2時間足らずで着く。70年の歳月はこれ一つとってみてもすばらしい進歩なのにとただただ驚く。私は日露戦争当時この世に生を受け、小学生の時に明治天皇の御大喪があり、第一次世界大戦の時は仙台のミッションスクールの女学生だった。毎夜寄宿舎の食堂に集まり、連合軍のためにホータイを巻いた。そして昭和になり、第二次世界大戦にあい敗戦の苦い経験をして今日に至った。明治・大正・昭和、そして平成と四代に渡って生命を与えられた自分を省みて、いまさらのように大変な年輪を重ねたものだと思う。

明治、大正そして昭和の初めは日本国中が貧しかった。私が小学校に入る前、祖父は困っている人達の生活を助けたいとの願いからであったと思うが、製糸工場を経営しており、娘たちに坐繰^{イタダキ}といって藪から生糸をとる作業をさせていた。主婦たちには家庭でできる坐繰を奨励していた。町の裏通りを歩くと、歌をうたいながら糸をとっている音を聞いたものだった。父は慶応義塾で福沢諭吉先生の薫陶を受けたので学問に対しては理解があった。

私が仙台の女学校を卒業して上級の学校に入る準備をしていた夏、大正10年8月、日本女子大学校に社会事業学部が新設されるという新聞記事を見た。父はすぐ賛成してくれた。

大正10年9月25日、叔母に連れられて日本女子大学校の門を入った。赤レンガ造りの豊明館(教育館)、続いてレンガ造りの講堂(現在の成瀬記念講堂)、校庭には太い桜の木が茂り、築山あり、沈丁花の植込みあり、誠に美しかった。

控室には入学者とその保護者で一杯だった。いよいよ講堂に入った時のあの感激に満ちた心持ちは一生忘れることができない。講堂の正面にはいまと同じく創立者成瀬校長の揮毫になるあの額がかかっている。大きな立派な花瓶には美しく花が活けてあった。教壇には麻生校長をはじめ評議員、内務省、文部省の役人が並んでおられた。日本で初めて、他の大学に先がけて創設される社会事業学部の発足を祝って下さったのだと思う。麻生校長はこの学部が創設されるに至った道程とその頃の社会状況について力強く話された。あのお声、あのお顔が70年経ったいまもなお耳底に残り、目に焼きついている。

日本女子大学校創立者、成瀬仁蔵先生が社会に目を向けておられたことはいうまでもなく、桜楓会は日本で初めて日暮里に託児所を設けていた。また、生江孝之先生によって社会事業の講義が始められていたという。こうしたことが社会事業学部の温床になったのだと思う。つまり社会事業学部は創立者のご意志を二代目麻生正蔵校長が実行に移されたのである。

全国各地から寄せられた100余名の志願者のなかから入学を許可されたのは64名で、なかには

師範学校を卒業して義務年限をすませた人、社会に出て活動してきた人、家庭を持っていた人等々、いろいろな経験を積んだ年輩者が多かった。女学校を出たのは半数であったが、翌年夏休みを終えて帰校したときは相当退学者があり、結局4年後卒業したものは30名であった。

社会事業学部の授業は今まで耳にしたこともなかった学問ばかりで、目を輝やかして先生のお講義を一言ものがすまいとノートをとるのに夢中だった。麻生校長は私共には勿体ないような一流の教授を集めて下さった。レンガ造りの豊明館が私共の控室であり教室であった。綿貫哲雄先生（高等師範並に東大教授）の社会学、人類学と英国産業革命史。高橋誠一郎先生（慶応大学教授）の経済原論、両先生の時間には他学部からの聴講生で教室は満員だった。高橋先生はいつも和服を召され、きれいにエリを重ね袴をはきお草履といったいでたちで、そのお姿は優雅であった。高橋先生のことで忘れられないことの一つ。それは試験問題である「国民経済と社会経済に就いて小論文を草せよ」というのである。論文という出題は初めてであったから皆びっくりしてしまった。私は何を書いたか忘れてしまったが、後で指導者の先生の話によると私が最高点で82点、最低の人が5点だったという。

昭和49年高橋誠一郎先生とご一緒に私の主人が勲一等を受賞した時、先生は受賞者を代表して陛下に御礼のお言葉を言上なさった。そのときのお声、お言葉の抑揚は大正10年にお講義を伺ったときとまったく同じで感無量だった。陛下の御前をさがってから日本女子大学の社会事業学部1年のとき、先生のお講義を伺った者ですとご挨拶申し上げた。その時の笑みをふくまれた先生のお顔は忘れられない。

茅野雅子先生（国文、4回生）には国語を教えられた。誠にやさしい方だった。「歌を忘れたカナリヤ」の真の意味を説明して頂いたことがなつかしい。劇作家として有名な大村嘉代子先生（国文、1回生）は作文の先生だった。大きな風貌の方で一本のはぐれ毛のない大きな束髪でうとうとと教壇のイスにおかけになって講義をなさったあのお姿はいまも目に浮かぶ。変態心理学の小熊虎之助先生の実演には驚かされた。4年間の先生方お一人お一人の思い出はつきない。70年の年月が過ぎ去った今日、つぎつぎにお他界なされてしまい誠に淋しい限りである。大正12年9月、3年生は夏期修養会で軽井沢にいた時だった。死者10万余、損害100億余円といわれた大震災が東京、横浜を中心にして起り壊滅の状態に陥った。あの美しいレンガ造りの講堂、豊明館、家政館等被害を受けた。講堂だけはいまも残っているがレンガ作りでなくなった。私共は幼稚園や小学校の2階を控室とすることになり、授業のたびに空いている教室に移り授業を受けなければならなかった。東京市役所の要請で私どもは焼け野原になった浅草に出かけ家庭調査に牛乳配達に忙しく立ち働いた。

大震災で大打撃を受けたので、国産品を奨励し経済的危機を乗り切らねばならないという学校の方針で国産品奨励展覧会が開かれたのは大正13年、4年生の時であった。私ども社会事業学部は婦人労働問題を取りあげ工場における婦人労働者に関する統計等を展示した、この展覧会には各皇族方がお成りになられた。私共がその統計のご説明をしなければならなかった。高貴の方々に指をさしてはいけない、上を向いてはならない等々言われ、どうしてご説明申し上げてよいか途方にくれ夢中だったことだけ覚えている。

大正14年3月、この年ラジオが開設された。学部1回生として30名卒業した。工場の女工監督

として倉敷紡績工場、鐘ヶ淵紡績工場へ、職業紹介事務局、職業紹介所、協調会託児所、幼稚園等へ全員就職した。私は母校に残ることになり講堂の2階にあった指導者室につめることになった。指導者長の藤原千代(国文、1回生)先生、安東幸子(国文、20回生)、西川兎美(家政、21回生)、田辺ミエ(師範、21回生)、原田美知江(国文)の諸先生の下に私は小さくなっていった。これらの先生方は学生のとき、代表主任として活躍された方々であった。

4年の時、米国で17年間研鑽を積まれた正田淑子先生(英文、1回生)が帰国され、学部長になられた。26回生の指導者で精華寮の寮監だった淀野彩子(家政、6回生)先生のお手伝いをしたり、24回生の指導者になられた正田淑子先生のお手伝いをしたりした。正田先生のお考えで社会事業の実習をすることになり、私は24回生と一緒に日暮里の貧民窟にあった愛隣団や桜楓会の託児所に行った。貧しいとはいえ、あんなひどい生活をしている人びとを見たのは初めてで驚いた。正田先生は東京連合婦人会やその他の婦人団体の会合にいつも私を連れて行って下さった。女子医大の吉岡弥生先生をはじめ当時の有名な婦人方の話を聞くことができ、良い勉強になった。

大正末期から昭和にかけて非合法だった共産党が台頭し、読書会とか研究会等の名目で学生たちは集り勉強していたようだった。街頭連絡で検束された学生もあった。指導者の先生の命令でその集りをつきとめたり、演説会があると聞けば出かけて行ったり大変だった。そうした運動は社会事業学部の学生だけでなく国文科の学生も参加していたが、何しろ社会という字のついている社会事業学部が一番目をつけられたのは事実だった。私が受け持った24回生では最も激しく運動をした2人が検束された。2人は勉強するために入学したのではなく、共産党の運動を拡大するためだと言っていた。終戦後共産党が合法化され、2人はだれにはばかることなく運動を続けていたようである。除名された桜楓会に復帰したいと希望を申し出られたが、当時の事情を知っている桜楓会の理事が他界されておられ、とうとう除名されたまま先年2人とも帰らぬ人となってしまった。

共産党問題からこの学部への入学志願者が年々少なくなり、創設10年続いた社会事業学部は家政学部三類となった。その機を期して正田先生は渡満され、昭和17年、戦争たけなわのとき、新京で急死された。その後家政学部三類から管理科と名前が変わり、戦後新制度になり新制大学社会福祉学科となった。社会事業学部から今日の社会福祉学科となったが、その精神には変わらない。多勢の卒業生が各方面で活躍している姿を見たり聞いたりするとき、私は学部1回生として本当に嬉しく思う。研究室の先生方の多くは同じ学科の卒業生であるし、しっかりと社会福祉学科を守り育てて下さるし、本当に嬉しく感謝にたえない。今後日本女子大学が続く限り、社会福祉学科がいよいよ充実発展することを願ってやまない。

おおつき たか： 社会福祉法人愛隣会理事
みどり会顧問

日本女子大学に在職して

藤 本 武

わたしが、日本女子大学社会福祉学科に在職したのは、1976-80年のわずか4ケ年にすぎませんでしたが、私の一生にとっては、思い出となる年月でした。

わたしは、大学を出てから産業組合に4年ほど勤めていましたが、それからあとは、労働科学研究所という、民間の研究所で、労働問題の調査・研究に明け暮れてきました。鉱山・工場・建設現場の労働者、船員、林業労働者・農民などの労働や生活状態の調査に、全国の40数県を、また中国、ソビエトやチェコあるいは西ヨーロッパをとび歩いて40年近くをすごしたあとでしたから、まったく違った環境での生活でした。もっとも、佐藤進先生や一番ヶ瀬康子先生、家政学部の松尾均先生、広田寿子先生など、以前から顔染みの人がいましたので、別に異和感はありませんでした。社会福祉学科の主任を1年、文学研究科の委員長を2年勤めました。皆さんのご厚情とご協力を得て、大過なく、楽しくすごすことができました。

若い女の学生さんばかりを相手に講義をした経験はありませんでしたが（婦人労働者相手の話しは何十回もやった経験がありました）、何んだか少し若返ったような気はしないではありませんでした。そのため、少々おしゃれになったかも知れませんが。

わたしの専門は経済学なので、講義は、その立場からの「貧乏論」と「社会運動史」の2つ、ゼミでは、風早八十二さんの「日本社会政策史」とエンゲルスの「イギリスにおける労働者階級の状態」をとりあげ、また日本の貧乏の代表的文献を各人に割りあて、その報告を求めるなどのやり方をとったこともありました。わたしの講義は、社会保障の実務には縁遠いもので、むしろ、思想的領域のものですが、ゼミの参加者もそんなに少なくはありませんでした。きくところによると、「社会運動史」の講義は「社会福祉士法」への対応上、とりやめになったようですが、大変残念なことです。今度出版しました拙著「労働運動と労働立法」のなかで、各国について実証的に検証したように、社会・労働立法は、すべて「社会運動」によって決定的な影響をうけており、日本でも最近のように労働運動がおとなしくなってくると（最近是世界中でいちばんストをしない国の仲間入りをしています）、社会保障や社会福祉は改悪されるというのが、経済・社会の法則です。こういう意味からも、復活してほしいと思っています。

女子大在職中「イギリス貧乏小史」の執筆にかかり、「文学部紀要」に（一）（二）（三）を掲載させていただき、退職後、若干補正加筆し、かつサッチャー政権までを書き加え、「資本主義と労働者階級」（副題は「イギリス貧乏小史」という表題で、法律文化社から出版したところ、「社会事業史研究会」から1987年度の「社会事業史文献賞」を頂戴しました。わたしにとっては、女子大在職中の研究学績の最高の記念碑ともいえるべきものです。イギリスの貧乏の歴史を、今日に至るまで通史的に概説したのは、イギリスにもでていませんが、それがみとめられたものと思っております。この本を書き上げたあと、日本の賃金・労働条件の国際比較の問題に時間をとら

児童福祉講座で結ばれた思い出

松島正儀

昭和24年より日本女子大学文学部に、社会福祉学科が新設され、新しい講座として「児童福祉」が開講され、その担当講師として昭和48年まで引続きお世話になりました。想えば24年間、楽しく目白にかよわせていただいた思い出はつきぬ感謝の気持です。

それには深いわけがありました。私の恩師生江孝之先生が、日本女子大学創立者成瀬先生と知己の間柄にあられ、生江先生が日本女子大を愛する心情と実動に感激しておりました。その先生より熱意あるおすすめに素直に従い講義担当となった次第です。

生江先生も菅先生もともに、私の経営責任にある、世田谷区上馬町の養護施設、東京育成園（当時、戦災、引揚孤児多数収容）の役員であられ、戦後運営、苦難の中によい助言をいただき、相互関係は密接でありました。

私は日本女子大学が当時、戦後の傷あと癒えぬなかに、伝統を生かし、先見の明をもって社会福祉学科を新設されたことに深い敬意と期待感をもっておりました。その後この学科では多くの福祉理論研究者と実践者を輩出し、社会的には高い貢献度を保持しておられ、とても嬉しいことと思っております。

この原稿を書きつつあるとき、第21回の「みどり会」総会が泉山館会議室で催され、嬉しい実践例の一つとして皆さまにお伝えしたいことがあります。それはみどり会総会で講演の講師として“岩波ホール”の総支配人の肩書で国際的にも活躍中の高野悦子（新制1回）さんがお話をされました。映画と福祉理念をむすぶ素敵な講演でありました。高野悦子さんは、自分の今日的活躍の源泉は社会福祉学科に学んだ故だと講演のなかで強調しておられました。人間の幸福追求と、映画の位置や価値、福祉の視座にある意味を創りたいと語っておられました。当日私は教師の側で出席していましたが、真に嬉しい思いで元気づけられ、社会福祉学科存立の意義を再確認する感がありました。

さて福祉史をたずねるとき、桜楓会日暮里託児所、丸山千代先生は著名でありますがとても本学ご出身で、社会福祉学科とは直接の関係があられました。実践指導では得がたい人物であられ、社会福祉学科としては、理論と実践の接点を考慮するとき、大学の学園内敷地において、実習に役立つ施設を新設できないものか、とくに児童福祉、母子福祉の面で、たとえば保育所、学童保育、母子相談、母親地域集会室等、規模は小さくてもよいから（当時600m²）是非実現したいものと、当時の学科長菅支那先生に希望申上げました。菅先生は結構、結構、やりましょう、とすぐさま突進の構え、私は驚きながらも明るい希望を抱いておりました。

次週の講義日には菅先生に伴われ、女子大の敷地内を詳細に実地調査を行いました。その結果、桜楓会館の奥、豊明小学校の南面、崖下の空地なら造れるのではないか、という見込みでありました。さらにもう1か所、大学の裏門側、大学学生寮の入口脇の空地を活用できるのではないか、

れ、女子大退職時に考えていたところの、アメリカなどについての貧乏小史に手がついていませんでしたが、今度さきの本の出版で、一区切りできましたので、今後はアメリカについて勉強する予定を立てております。もっとも、ついこの間77才になりましたので、どこまでやりおせるかわかりませんが。

今年もいま時分、あのしだれ桜が満開になっているでしょう。女子大の花というところ、この桜と沈丁花の2つが印象に残っています。それに向きの「田中角栄邸」です。当時「ロッキード事件」でいつもテレビに出ましたが、今度は「リクルート事件」で、共産党以外の野党まで包みこんだ自民党の大汚職・疑惑で、首相・前首相を先頭にした底なしの大事件に発展しそうです。日本の民主主義のレベルの低さを痛感させられます。

社会福祉学科は、新学部の開設と同時に、生田校舎に順次移って行かれるようですが、わたしは小田急沿線に住んでいますので、大分近くなります。身体が元気である限り、ときどき伺いたいと思っています。

(ふじもと たけし：元本学教授)

ということでありました。そこで次週の講義日には菅先生に同道して学長室に伺い学長先生にお目にかかり、菅先生が熱心に趣意を述べられ、私も懸命に説明申し上げましたが結果はだめでした。趣旨は賛成だが役所の許可はまず困難との理由でありました。

その頃、大学の目白祭があり、社会福祉学科の前田栄助教授がこの実習施設について、大変ご熱意を持たれ、芸術科の特別な協力をいただいて、素敵な模型(木造2階建120cm)を作製されました。学科の意のあるところを諒承され、設計も大変よく、作品は美的感覚もあり立派なものでした。目白祭では注目をあびた出品で好評でした。教育、医学等と同様に福祉教育における実習は重要であります。わが国では開拓期という姿で、視点からはずれたまま経過していました(1950-60年代)。そこでこの際小規模でもよいから学内で試みる方向は採れないか、と研究室では盛り上りをみたわけでありました。私の記憶をたどって記してみました。昨今は実習教育のシステム化が国際化とあわせ検討されることとなりましたが、学内現環境ではむづかしさがあるでしょう。

さて私が身のひきしまる思いで責任を感じた思い出があります。それは当時社会福祉学科の軸であられた菅、松本両教授が留学なさった時のことでもあります。昭和28年より30年にかけて松本武子先生がアメリカへ、昭和29年より30年にかけて菅支那先生がイギリスへ留学なさいました。一番ケ瀬先生、前田先生がいらっしゃるから大丈夫でしょうと思っていましたら、学長先生からお目にかかりたい、との連絡があり、面談の用件は、菅、松本両教授が都合悪く同時留学となりましたので、不在中特別ご協力を頼むとのことのお言葉でした。当時講師経験5年、女子大の状況も心得ましたし高年の故もあり諒解、最善を尽しますと申し上げましたが、ひどく責任を感じた忘れ難い時代でした。幸い両教授とも恙なく留学を完了され、研究室で祝会を催し喜び合った思い出は歴史ものです。

昨今は一番ケ瀬先生が日本女子大社会福祉学科を基盤に、全日本の社会福祉学会を代表されるお立場と、さらに日本学術会議に列せられておられ、福祉学理に貢献される幅の大きいことを嬉しく思っています。

お世話になった24ヶ年の思い出は、山々ありますが紙面の都合で、またの機会に。

(まつしま まさのり：社会福祉法人育成園理事長)

七十九歳にして憶う

松本 武子

最近のできごと

この間大学からの帰途のことです。上野の乗換えで、7番ホームを降りてきたら高崎行の最後部が控えていました。(折り返しですから最後部は最前部)大急ぎで乗り込みました。最後の席が空いていたのでホッとしていつものように手摺りに手提をひっかけて紙袋を下におきました。重いものを持つことが一番苦手なのです。紙袋には実習先にもっていく土産の菓子箱が入っていました。浦和まで20分。「ウラワー」という声にはっとして新聞をたたみさざと降りました。とたんに紙袋だけを大事に持っていたのに気づいたのです。もちろん電車は彼方に一。

前が事務所だったので飛び込みました。忙しくしている駅長が相手になってくれるのを待つこと暫時のイライラ。「車両は何番目ですか。全部調べてまわるのは大変なんですよ。」と。駅長に鮮かに答えることができました。「1番前の車両の1番後の席、浦和に向かって右側の席です。」

あったのです。大宮駅に行き、まず中味を問われました。さて持ち合せはいくらかと返事に窮した私に向うから七万あまりと。そうだ、実習先への謝礼袋が3袋あったのでした。受領証も入っている公金ですから紛失したら面倒なことでした。

もう決して手摺りに袋をかけることはしない、と79歳にして初めて学ぶことがあるのに気づきました。忘れものをする時は車両を覚えておくことです。

ストレス解消

一つだけだれにもいわなかったストレスをここで解消いたします。それは30年も以前のこと。社会福祉学会の関東部会で「厚生白書の検討」がテーマでした。〇〇先生が発表された後、思い切って私は立ちあがりました。その前夜厚生白書を通読した私は、白書に一言も社会福祉の専門教育についてふれられていないことを残念に思ったのです。アメリカのソーシャルワークイアブック(1954年版)には社会事業教育発展の歴史や現状に関して数10ページも載っています。ところでそのとき私は冒頭に「〇〇先生がご意見をおっしゃいましたので私もひとこと申し上げます」といったのです。アメリカから帰国したばかりで厚生省に出入りしていなかった私には、厚生白書にももの申す勇氣などありませんでした。〇〇先生の尾について、という意味だったのです。

一週間ほどして主任教授に私は呼ばれました。わざわざ別室に私を伴い厳しい表情のその教授は、私に「あなたは関東部会の席で〇〇教授に反対意見を述べたそうですね」と詰問されるのです。私は吃驚してそのときの状況を説明しかけましたが、私にもものいわさずその教授はご自分のいうだけのことをいわれると席を立たれました。時間もなかったのでしょうか。

その正直な教授にとっては私の説明は言訳に過ぎないと思われていたのでしょうか。どなたかその会に出席した方が、発表の内容は何も考えずに松本が立って反対意見を述べたと伝えたに

違いありません。私のその日の日誌には「〇〇先生が意見をいわれたので私もいうことができた」と書いてあるのです。

10年も経たある日、懇談会の帰途バス待ちをしているときに、私はこの日のことをその謀教授に話しました。その教授は何も記憶しておられませんでした。くり返し説明するのも私はいやでした。ストレスは消えず私の胸に残りました。私はこのときほどショックをうけたことはないのです。講談本によく出る、「白いものが黒にみられる」という事実が世の中にはあるのだと悟ったのはこのときです。真実一路を教えこまれて生きてきた私の人生観を変えるほどのショックでした。私の表現が舌足らずであったことに原因があったのだと、冷静に考える現在ではあります。

ホーソンの短篇に“David Swan”というストーリーがあります。卒業直後は一般の英語を担当させられましたから、私はホーソンのものをテキストに使いました。両親を失ったスワンという男の子が遠くに住む叔父を頼って荷袋を肩に歩いて行く一人旅の旅路で、疲れ切って湖の辺りの樹立の蔭で一休みする、そして寝入ってしまったそのひととりの間に起きた事柄を描写したものです。

ある高貴な婦人が水道管に立ち寄ってスワンの寝顔の愛らしさに魅せられました。子のない夫人は養子にしたいものだと思いを決めた瞬間、従者に声をかけられて我にかえり思いを断ち切りました。ある恐ろしい盗人が人目を避けて木蔭に入りスワンをみつけました。手に握っている小袋を盗ろうとしたのですが、とたんに人声がしたのであわてて立ち去りました。もしスワンが目を覚まし声をあげたらおそらく殺されたでしょう。いろいろのことが身の回りに起ったのも知らず、熟睡から目覚めたスワンは叔父宅に向って再び歩き出しました。ホーソンは自分の知らないことが周囲で語られ、なされてもいる運命の神秘性をも語ろうとしたのでしょう。スワンのようにながい一生の間には自分の知らないいろいろなこともあるのでしょう。

わたくしの今日

私は現在幸せ者だと考えています。全く何も他のことは考えずに研究室とわが家との往復で歳月を送ってきたのですが、定年退職してからもつながりは消えません。年度の終りには藤本、吉田両先生とともにお招きにあづかっておりますし、卒業生の方々にはいろいろとお世話になっています。心のこもるおたよりをいただいたり、病院の手配をいただいたり、研究の手伝いをいただいたり、そしてありがたいことには税の申告まで引受けて下さる方が現われました。いろいろな形で私を励まして下さるのです。本当に私はありがたいと思っています。何を私はこの方にしてあげたのだろう、と考えこんでしまいます。

ただいま、老化傾向の主人との2人暮らし。聖徳短大も定年制ができたのですが、委嘱という形で変わりなく勤めさせていただいています。幸せなことに、戦前、戦後と、我が家で暮した甥や姪3人が今は立派に社会人となり、自家をもち子を育て、私どもに気をつけてくれます。舅姑とともに暮らし、この甥姪3人も主人が中学を終えると1人づつ呼びよせたのですから、金もない物もない戦後の生活の中で私は決して行き届いたやさしい叔母でもあり得ず、ただ宿命のごとく夢中で過ごしてきました。でも現在姪は毎水曜主人の相手にきてくれますし、私は今は自分の腹を痛めない子が3人あると思っています。

先月、南米に駐在勤務し4年経た長男、和憲が一時休暇を与えられ、孫2人を連れわが家に帰ってくれました。この和憲が3歳のとき私は留学を決心し、5歳のとき残して渡米したのです。私は和憲に甥姪たちが親身になって労わってくれることどもを伝えました。

黙って私の話を聞いていた和憲は私が話し終えると申しました、ただひとこと。

「よかったね」

このひとことは私にとって千金の重みがありました。昔の家庭内の苦労はみなふっ飛んでしまうような気がしました。

恩師の姿

子は親の背中をみて大きくなるといいますが、私は恩師の背中をみて大きくなったような気がします。目を閉じて卒業後の歳月を顧みるとき、2人の恩師のお顔が浮ぶのです。それは戦前の方でなければご存じないのですが、寮監長の大岡葛枝先生、そして学生部長兼社会事業学部長代理であった藤原千代先生。私の胸にはまことに巨大な像としてお2人の姿が映じています。どちらの方にも人間としての瑕瑾もあったかも知れない。しかし、お2人とも強い信念の方でありました。ご自分をありのままに出すことを憚らず信じることを行い、訴えられました。寮監長として大岡先生は寮監を教育することに打ち込んでいられました。「私のいくさ」には私が先生に叱られて貧血を起し倒れてしまったことが書いてあります。だれでも叱られました。しかし先生のお言葉に間違いはありませんでした。私は、のち研究室で指導の立場に立った自分自身を、自分は大岡先生のように叱れない、と顧みて自責の念に駆られたことが再々あります。先生の前に出ると、教育者としての在り方を常に問われているようでした。

藤原先生は愛の方でありました。私は寮監であり、社会事業学部の指導者ですからよく明桂寮の先生のお部屋にも行きました。いつもお菓子をご馳走になったものです。学生が問題を起こし困ったときにも先生はいかに対処すればよいか一緒に考えて下さいました。私どもは何1つ構えることなく先生に接することができました。「ああ先生のように私は学生を愛することができない」と先生についていながら私はよく思いました。

性格が相反してられるこのお2人の先生に関して、このお2人の大先生は仲が悪いのだという世評が伝わっていました。本当に、俗人の目で評価すればそうであったのかも知れません。私も大岡先生の前に行くと「藤原先生は何と言ったのか」と問われ、藤原先生の前に行くと「大岡先生は？」と問われましたから。どちらも日本女大創立1回生なのです。但し大岡先生はもう1年勉強したいといって2回生として卒業されたと聞いています。戦争が始まったときお2人とも「邪魔になるから」と退職されたと聞いています。戦争中、戦後、私も子を育て学校を続けることが精一杯でこのお2人の先生のご消息さえ不明のまま打ち過ぎました。世の中が平静になりお2人の先生のご消息を知り、つつがなく過ごされていることを知ってもお訪ねすることもせずにごしました。研究室における私の生活には余裕がなかったように思います。

実は藤原先生は私が教授にならないことを非常に心配していられたのでした。多数の学内の昇進が発表になった年、突然に藤原先生が来られ私を呼び出して「何故お前は教授にならないのか」と問いつめるようにいわれたことがあります。といっても私にはお答えできません。その頃は教

授会が成立しておらず科長会のようなところで決められていたようです。私はむしろご高齢の先生のご気分の高まりを恐れて努めて平静を装って応待したのを覚えています。

次の期だったでしょうか。教授にされました。私の机の引き出しにはそのとき先生が下さったお葉書があります。

「前略扱此度待ちに待っていました願が達せられまして御同慶に堪えません。これで溜飲が下がりました清せい致しました。先日月田様（上代様）より早速御知らせ頂きました。御祝申し上げます……」34年6月19日と書いてあります。この葉書は私の大切な宝ものです。

突然にある日、藤原先生ご逝去の報を私は耳にしました。寿齢94歳、39年のことです。その日、その夜私は眠られませんでした。数々の先生のご愛情を偲び、仕事に夢中になってお見舞いにも行かなかったこと、ご恩に何らお応えしなかったことを憶うと涙がとまりませんでした。とうとう朝になりました。私は悲しみをどうすることもできずまんじりとただ机の前に坐していたのです。そのとき、私は無性に大岡先生に訴えたくまりました。私は今でも不思議なのです。大岡先生以外に私には伝える人がないように感じたこと。朝4時になるのを待って私は大岡先生にと受話器をとりあげました。かつて先生に電話したこともなかったのです。すぐに先生のお声が返ってきました。先生も眠られなかったのかも知れません。「……先生、藤原先生が……」もう私は声が続きませんでした。すると先生は「泣きなさい。泣きなさい。」といて下さいました。

私は今もはっきりこの大岡先生のお声を思い出します。そしてやはり藤原先生と大岡先生は一番通じ合っていたお互い同志でいられたのだと思います。お2人の心は成瀬先生に育てられて一生を大学のために捧げられる信念で結びついていたのだと思います。私は学生として寮生活を6年し寮監に残りましたから、まだ当時は成瀬先生に直接接せられた先生方が多く寮監にも大学にもいられて、多くの先生方にいろいろ教えられました。このお2人の先生を憶うとき、心のふるさどがそこに在るような気がするのです。

今日私が自らを「幸せ者」と思うことのできるのも、「大学における私」を育てて下さった恩師ゆえにと思わずにいられないのです。それにしても不肖な弟子、卒業生の皆様にも、私の不用意な言葉が皆様の心にのこっており、私自身は忘れていたことも多々あることでしょう。わが越し方に罪障を感じながら、感謝の現在があることをおつたえいたたく、よしなしごとを書きつらねました。

（まつもと たけこ：本学名誉教授）

おもいで片々

五味 百合子

昭和戦前期学園生活については、その時代背景を伝えずに語ることはできません。

わたくしは1931年(昭和6年)32回生として入学、1935年(昭和10年)春卒業いたしました。社会事業学部終末期であり、卒業生は6名でありました。

太平洋戦争の発端となった満鉄柳条溝爆破事件は入学の年9月に発生しました。戦後になってその事件は関東軍によって仕組まれたものという歴史的事実が明らかにされました。それから1945年敗戦まで、15年戦争はまさにわたくしの青春をおおうものであり、その中の4年間が目白の学生生活であったわけでございます。

昭和の初期については、いつも繰り返し書いたり述べたりいたしますので、自分自身でまたかと思ってしまうのですが、日本経済は国際恐慌の波を受けて未曾有の不況に喘ぎ、失業者は300万人ともいわれました。「大学は出たけれど」というような映画もつくられて、若者は次第に希望を失い、世には退廃の気がみちはじめました。「東京行進曲」や「君恋し」などが唄われておりました。

さらに東北、北海道の冷害、凶作が追い打ちをかけ、一家心中、娘の身売り、欠食児童等々社会をゆるがす問題の多発から社会不安は増大するばかりでした。国民は生活の安定を願って国内の改革を求めて、軍部ファシズムの台頭を許すこととなってしまいました。

大正期より労働者・農民の抵抗運動は激しく進行しておりましたが、このころの状況の中で、昭和3年、4年と続く大弾圧とともに、治安維持法の改正、特高警察の発足等恐怖政治が強められました。不当に検挙、拘束された人々の拷問は流血の死を招くようなものでさえありました。運動は非合法化され、指導層は地下にもぐりました。

大学、専門学校の学生運動も合法的活動から非合法化の方向に追い込まれ、各地の学校には共産青年同盟指導の読書会(RS)が組織され、学習活動を通して地域的に学校間の連絡網がつくられ尖鋭化していったようでありました。目白は早稲田のグループに入ったのでありましょうか。

目白の学生運動もなかなか盛んだったようで、当時の学生運動の記録に残されております。それは社会事業学部だけではなく、むしろ他学科にも多くの検挙者が相次いだようでありました。わたくしどもの入学前年昭和6年秋、学制改革問題で大学本科と高等学部の学生130余名が盟休したということなど婦人問題年表に記されています。

社会事業学部については、さきに刊行された「めじろ路」に先輩の立岩宮子様や中島さつき様がその一端を記しておられます。このお二方はわたくしが入学したとき4年生と2年生におられ、当時の学部長正田淑子先生は相当きびしく思想的抑圧を行われましたにもかかわらず、この2つのクラスについてはいつも優秀だとおっしゃられ、わたくしどものクラスなどは劣等生だと軽べつしておられました。立岩、中島両先輩には当時の状況について正史としての記録を残しておい

ていただきたいものでございます。多数現存の方がおられますので公表しないかまたは匿名のままでもよろしいのでは。

さてわたくしの入学したころは、まだそのような事態が学校の中に残り検挙者も続いておりましたが、きびしく抑え込まれた運動は多くの退学者を出しながら終息に向っておりました。時代は急に戦時体制へと傾斜していました。

正田先生から個別に呼び出され学生たちの動きについて問い詰められたことがありますが、何を訊かれたかいまはよく覚えておりませんし、わたくしに答えられることはなかったと思います。わたくしは学校のRSには加わらず、学習は全く別のところでしておりましたので。

このような過程で、学制の改革となり、正田先生は責任をとらされたのでありましょうか、追放されるようにご退職となり満州へ渡られました。数年後の地で亡くなられ、そのご遺骨を迎えて、目白の雲照院で先輩の方々のお手伝いをしてお葬儀を営みました。先生のことは庄田さだ先生がいちばんよくご存知でありましょうけれど、いまのうちにその伝が編まれればよいと願われます。

社会事業学部は結局廃され、昭和8年入学された方々のとき、家政学部三類となりました。わたくしは2年生の終りのときでありました。まったく勉強家ではありませんでした。女学校卒業前に、目白に正田先生をおたずねして入学を決意し、この学部に誇りを持っておりましたので、大きな痛手を受け、残る2年間の学生生活は、学校への反発を強く持ち続けるものとなりました。結局良い学生とはなれず、ほどほどに最小のことをしながらようやく卒業したということでございます。

軽井沢の夏季修養会に1度も参加しなかったり、実践倫理のノートを白紙のまま提出したりというようなことを敢行して、リーダーの柴木三浦先生を困惑させ、先生のような善良な方に本当に申し訳ないことをいたしました。

しかし施設見学や社会事業実習は、良いおもいでをたくさん持つことができたものでした。実習先の猿江善隣館ではリッチモンドのケースワークも館長三上先生から原書に接する機会を与えられ、家庭訪問をしたり記録のとり方も教えられました。ケースワークというものが紹介されはじめたばかりの段階でありましたが、善隣館では先駆的に取り組んでおられました。また猿江裏の済生会診療所で歳末診療をお手伝いして、都市スラムの実態を身をもって知りましたが、清潔魔といわれた母親のひんしゅくを買うものでありました。

片々たるおもいでは限りありませんが、知的なものは乏しくお恥かしい次第でございます。

正田先生のゼミで女性の発達史を学びましたことは、のちのち女性の問題を考えるきっかけともなりまた終生のテーマにもでき、とても感謝いたしております。また先生にお習いした英語は大変独特なもので、文章の構成を理解できるようなテキストを作られ、そのご指導はユニークでありました。先生がご退職後わたくしの英語力はぐっと下るばかりでございました。

綿貫先生とはけんか別れをいたしました。連れ添うている必要はないね、別れましょうというような結末でした。しかし卒業後も先生には長くお覚えいただきました。高橋先生のお講義は名高い美しい日本語で、しかも名調子、ともかく難しくさっぱりわからないで困りました。どのようにしてお点をいただいたのでしょうか。先生のお講義に何年も続けて出席していた方がある

のは驚きでございました。

小熊虎之助先生のお点がバカによかったということをのちに知りましたが、どういうわけだったのでしょうか。その「変態心理」という講義名はいささか異様でこだわりました。

ドイツ語を始めて、川田熊太郎先生のご指導を受けながらモノにならなくて申し訳ないことをいたしました。先生のドイツ観念哲学もずい分難しいお講義で、レポートを書くとき東大の哲学の方にたすけてもらいました。

永井亨先生はいちばん時代を語られ、ファシズムの危機を説かれ印象的でありました。執筆も講演も断たれていると伺っておりました。先生には社会事業協会研究生の受験の際特別お世話をいただきました。

卒論は林恵海先生ご指導のもとに、江花さんと共同で、当時日本の社会的課題のひとつとされていた乳児死亡について都鄙別差違をとらえながら国民生活の都市農村格差について考察いたしました。論文そのものはのち研究室から手許に戻りバラしてしまいましたので何を書いたのやらさっぱり覚えておりませんまったく自信はございません。先生とはその後も長くおつきあいをいただき、戦後社会事業大学でお目にかかることも多くなりました。

戸田先生はどうも男女差別で、東大の学生と比較されては“女なんてヤツあ”とバカにされていたように思います。しかし綿貫先生とけんか別れたわたくしどもを引き受けてくださいました。

わたくしは研究係ということでよく講師室に出入りし、高橋先生から大磯坂田山心中のおまんじゅうをごちそうになったり、生江先生のご二男の健二氏が慶応在学中からのプロレタリア芸術運動の活動家で検挙され、心を痛められるご様子や、綿貫先生のご息が不慮で亡くなられたことや、戸田先生には2人のお嬢様がいらっしゃることや、お講義よりもそういうことをよく覚えております。

年をとりますとおもいで話ばかりとなりますが、社会福祉学科の将来につきましては、現役の先生方が、今日の国民の生活実態や国際動向をふまえ新しい発想をもって新たな展開を企画されていると伺います。

国民の生活をまもる社会福祉・社会保障が曲り角に立ったかといわれる今日、学科の研究と教育が、時代に流されることのない基本的路線をさし示していただきますよう、そして日本の社会福祉に指導的役割を果す人材を育成してくださるよう期待いたします。

(ごみ ゆりこ：日本社会事業大学名誉教授)

大正後半の女子大生

吉田久一

大正後年の女子大生は私より10数歳上で、いわば先生格の年齢に当る。大正デモクラシーは「教養主義」的といわれようと、この人たちに親しく教えを受けたことは、生涯の儲けものであった。身の辺のそのような女性を通じ、その思想や時代を考えてみたいのが、この小稿である。

鈴木しげのさん。しばらくみどり会の名簿から消えていた。私には遠縁に当り、私に社会事業の手ほどきをしてくれた1人である。実家は山村の在村地主で村長をした旧家。鈴木さんの兄さんは柔和な、仏さんのような顔をした人であった。

鈴木さんの在学した高田高女（現北城高）は、古い城下町の学校で、日本の女学校でもっとも早くストライキをやった学校の1つであった。鈴木さんが日本女子大社会事業専攻を選ぶに多くの困難があった。結婚資金をそれに代えてくれとせがんだと聞いている。社会事業専攻はあの地方でちょっとした話題になったことを憶えている。

鈴木さんの女子大生活は何も知らない。丸山千代先生に愛され、牧賢一氏らといっしょに長く西窓学園に関係していた。同級というほどのこともなかったろうが、東大セツルメント等と交流もあり、間島憊氏の指導もうけていた。そんなことで、マルクス主義にもひかれてゆき、大塚署に検挙された。そのころ母の弟が女子大の物理の教授をしていたので、貰い下げに奔走していた。マルクス主義の理解もさして深くなかったろうが、大正後半はそういう時代であった。しかし、「思想」を知ったことが鈴木さんの悲劇のはじまりで、生活のため浴風園の寮母となり、女子大からも忘れられていった。

浴風園で小沢一氏が寮母を中心としてケースワークをはじめたのは、昭和10年前後である。そのころ私はしばしば浴風園に鈴木さんをたずねたが、思想問題について話したことはほとんどない。戦争が激しくなり鈴木さんは家兄のもとに帰り、姉さんが死んだのでその後ぞえとして結婚した。夫の父は代議士として国会にでたあの地方では名士であったが、鈴木さんの夫は中学出の平凡でやさしい人であった。敗戦直後鈴木さんが40幾歳かで死んだ。古い大きな家の鈴木さんの仏前に廻向した時、その家の後嗣は、農村には教育がありすぎたと、継母のことを語っていた。

私の書齋に、栄木三浦さんが、生江孝之先生から初版『社会事業綱要』（1923年）を使用して、講義を受けたその書き込みの書物がある。私は1938—43年ごろまで、黒い扉で囲まれた女子大の寮の後の雑司ヶ谷に下宿していたことがある。その附近はまだ樹木がうっ蒼と茂り、それが雑司ヶ谷の墓地に続き、池袋までつながっていた。下宿の前の小路は、女子大生達はロマンス小路と呼んでいた。下宿のすぐ下の黒い小さな家に栄木さんは住んでおられた。

栄木さんについては、後輩で世話に当られた松本武子さんがもっともくわしいであろう。その

ころもう戦争が始まっていたが、12、3の学校で学生社会事業連盟を組織していた。私も役員であったので、女子大からこられる栄木、松本、五味百合子、大橋みち子さん（卒業後修道女になられた）のみなさんと知り合った。女子大の学生はまだこのような会には参加できず、卒業生が代わって参加していた。

栄木さんは鹿児島県出身で、連盟主催の谷山恵林氏の「日本社会事業史」連続講義等に欠かさず出席しておられた。栄木さんの時代はまだ女一人で生きていくには辛い時代であった。栄木さんは40そこそこで亡くなられた。葬儀は自宅で営まれ、私の下宿が連盟の学生たちの溜り場となった。私のところに栄木さんの写真数葉ある。

鈴木さんと高田高女を前後して山岸多嘉子さんがいた。山岸さんの第五郎君は私の高田中学の同級親友で、大学時代は日本の柔道界を代表した一人である。私がストライキのリーダーで明け暮れしていたころ、五郎君もリーダーで停学処分になった。後に蒙古（現モンゴル）の徳王(?)の顧問になったりしたが、敗戦後間もなく死んだ。山岸さんの弟に5.15事件の首相官邸裏門組の責任者で海軍士官の宏さんがいる。しばらく前栃木県の老人ホームにおられると伝え聞いたが、その後は知らない。

山岸さんは東京女子大をでて、新潮社の婦人記者であったが、女性の婦人記者としては早い1人だろう。このころ住んでおられた牛込薬王寺のご自宅を訪ねたことがある。日中戦争のころ婦人記者として中国にわたり、男装で銃剣を帯し、前線のレポートを日本に送っていた姿を憶えている人もいるだろう。これは私の推測であるが、太平洋戦争の終わりごろ、中国共産党にひかれていったのではないかと思う。もともと組織力抜群の山岸さんは、揚子江下流沿岸で壮大な社会事業施設や地域福祉をはじめ、広く中国の人びとに慕われた。施設名は忘れたが（揚嘉園だったか）、山岸さんの中国名は揚嘉香で、中国語も達者であつたらしい。

敗戦後その仕事を中国の人にゆずり、郷里高田に帰った。そして、高田城址で山羊を中心に牧舎を経営していた。私ばかりでなく、家内も山岸さんに可愛いがられたが、闘士の面影もなく優しい人で、膨大な中国に残した仕事も気にしている様子もなかった。間もなく牧舎の経営をやめ、マルキストとして著名な愛知大学の教授と結婚し、間もなく死んだときいている。やはり40歳をあまり出ていなかったろう。

大正後年に女子大生活を送り、思想に目覚める日中戦争、太平洋戦争に人生で最も豊かなるべき壮年期がぶつかり、そして短命で終わった人びとを、鎮魂の思いを含めて叙べた。それとケースは異なるが同じ世代で昨年81歳で、母の命日とまったく同じ3月18日に逝った姉下重雅緒についても一言残しておきたい。姉の生涯は看病の一生で、最初の夫は結核で7年間看病の末亡くし、2度目の夫も長年わずらった末結核で死んだ。高田女学校では多少の短歌の才能もあり、成績も悪くなかったので、日本女子大国文科に推せん入学を許されていたが、父の反対でこわれた。母は姉に不幸が訪れるたびに、女子大の途を選ばなかったことを叱責しながら不幸な子に代って悔んでいた。生涯看病に当たり尽しきったほうが幸福だったか、女子大に行ったほうが幸福だったのか。姉の遺稿歌集に『むらさきの』がある。通夜や葬儀にみえた映画監督の大島渚さんが「女

の一生」という短文で、姉を追悼してられる。その文中に姉の23歳ごろ、はじめの夫の看病をしながらつくった短歌

肺病の夫と二人の古き家の

風呂釜に今日も火は燃えいたり

をあげてられる(1989. 5. 6)。

〔よしだ きゅういち：元本学教授
日本社会事業大学名誉教授〕

生活問題の今日的断想

松尾 均

まえおき

私が社会福祉学科に在籍したのは、1958年から10年間であったが、この期間を契機に、生活実態とか、生活政策とか、生活闘争とか、“生活”にまつわる活動や論議に参加することが、しばしばであった。そのたびに、「どんな場面に面しても、自分の尺度(もの)をあててみたい」と思いつづけた。そうでなければ、場当りの対応をくり返すだけだからである。いま、最近用いている私の尺度(もの)を掲げると、平凡な公式であるが、つぎのとおりである。

1. 生活(L)とは、生命の社会的活動である。
2. その活動は、労働力(A)を売り、労働を行い、賃金(G)を入手し、消費物資やサービス(W)を購入し、本人ならびに家族の再生産をはかるという様式をとる。
3. その様式は、労働や消費のどの一環についても、また、各環の関連についても各人の思考(D)が働いている。
4. さらに、生活は個人的に切断されているものではなく、生活する者(M)たちの協働をおしてなりたっている。

以下、この私なりの“生活公式”を、1945年以降の各時期に適用してみよう。

転換期以前

1970年代半ばを“転換期”として、まず、1945～55年に注目するに、この時期は、いわば始発期であり、生産も生産関係も混乱していた。このために、生活公式は、その推進のトップ環である労働の場をもたず、A-Gは封殺され、したがって、生活様式は未定型であった。

1955～65年は、経済活動が高揚し、A-G-Gという様式が定着した。生産と分配との間には大きい開差がみられたが、労働市場も開け、賃金も漸増し、消費もおくればせながら、いわゆる“近代化”に向った。

しかし、1965～75年には、これまでの“高度”な経済活動の内実が露呈してきた。高物価と高負担や、教育・交通・医療などの社会的な生活手段の不備や、生活環境の荒廃が目だってきた。このため、生活公式は個人的領域から社会的領域へ拡大せざるをえなくなった。

転換期以後

1970年代半ばに至るや、経済活動の“減量合理化”や労働界の再編も作用して、従来の、いわば経済軸に傾斜していた生活公式の動揺がはじまった。学歴主義とか能力偏重とかいう労働市場のなかから“中流社会”現象が横行し、生活ニーズは資本のデマンドのなかに包摂され、“生活の質”は拡散していった。経済社会が成熟したわけである。このために、私などがたっていた価

値法則一辺倒(?)のマルクス経済学は後退(?)し、生活問題は内在的に定在化しつつも、外在的に実在化することは少なくなった。

1980年の経過のなかで、“中流社会”に亀裂が生じた。国富は世界一となり、いわば経済大国となったが、国民の実質購買力は低く、労働時間は長く、しかも、土地や金融資産の格差が顕著になってきた。さらに、この期に“戦後体制の決算”という行財政改革が進行し、生活公式の各環の分断がすすみ、生活者たちは肝心な思考力をなくし、“自己喪失”に陥った。こうして、今日、生活問題をめぐる定在と実在との間のギャップは打開し難く深化してきた。

今日的論議

事態に面して、伝統的な視点を固守するものもいるが、変節的な転回を試みるものもいる。また、もう一度生活公式の各環から見直そうという人もいるが、改めて各環の総合にとり組もうという人もいる。他面では、西欧諸国の一部の思潮にならい、やたらに、超経済社会的に、生命とか、人間とか、自然とか、理想とかをばらまく見解もある。

注目すべきは、この後者である。ここでは、従来の“経済原理”に対抗して、“人間原理”を唱導するものようであるが、その論拠も論脈もさだかでない。ただ「世のなかは変わったから、われわれも変っていかうではないか」というにすぎない。いかなる論脈で、今日の“自己喪失”を脱却しようとするのか、また、いかにして、生活から“生活者”への回路を切り開こうとしているのか、不透明のかぎりである。

かえりみて、生活問題の調査・研究には、身を削るようなきびしさを伴うが、だからしてそこには言いしれぬファイトも湧いてくる。そうした生活問題を礎石に、社会福祉の強固な構築にとり組まれることを切望したい。

(まつお ひとし：本学名誉教授)

20年後の報告

江口英一

「社会事業開講70周年」の記念号のため何か書くように、とのおさそいである。「70周年」、どうもおめでとう存じます。

ふりかえてみると、私も実は昨年7月、満70歳になり、本年3月、中央大学を定年退職した。これはまったくの私事で、それだけのことであるが、20年余前、日本女子大学から中央大学へうつるときの頃の思い出もあり、私にとってその後のこともいつか報告しておきたいような気がずつとしてきたし、そのよき機会を与えていただいたと考えて、私事をまじえて、ひとこと書かせてもらいたいと思う。

私が本学社会福祉学科の専任教員を辞して、中央大学経済学部に入ったのは、昭和43年春であった。時のたつのはあつという間であると思う。そのことは平凡なだけに打消せない真理だ。けれどもやめていくとそのあれこれは、平凡ではなく、私は肝に銘じて忘れられないことが多々あった。私が本学をやめて、他大学にうつるということを耳にした本学学生、とくに私のゼミの諸君が14.5人、私がいつもとじこもっていた社会調査実習室のドアをあけ、ドヤドヤとやって来て私をとりかこみ、口ぐちにいった。あれは学年末であったから、1月終りか2月の頃であっただろう。木造の古びた部屋にはまだ鉄製の石炭ストーブがあって、赤々と火が燃えていた。

「あなたは他大学へうつる、ということはほんとうか。あなたは社会福祉の学生を教えるということに価値を見出さなくなったのか。あなたは社会福祉という学問と研究をやめるのか。」等々。私は、それに対してまともな返事をするのができなかった、と行ってよい。私は、それらはすべてそうではないとほそほそいい、もちろん社会福祉の学生とともに学ぶことは大事だと思っていること、私は経済学部へはいくが、これからも社会福祉の学問をすすめるということを行い、最後に「一応きまってしまったので、」という学生たちは下を向いたまま、何もいわず、出ていった。私は早まったことをしたものだと思つた。ただ、社会福祉、そのための社会調査研究を馬車馬のようにやっけていても、何か行きづまりを感じていたことから発したことだったが、そんなことは学校をうつらなくても解決できるのではないのか、との学生の言葉には一言もなかった。ともあれ、内心私はまったく教師冥利に尽きるとは、このことだと思つた。このようなことを、この大学の社会福祉の学生以外、だれがいうだろう。かけがえのない学生たちを私は失ったものだ。私はそう思つたが、つづいて吹き荒れる70年安保闘争と「大学紛争」の大学自身の大揺れの中で、私の決心も揺れそうになることもなかったとはいえない。

ここでいっておかなければならないのは、専修大学経済学部、東京大学社会科学研究所、北海道大学教育学部などを学問の世界であちこちゆれてきた私の生涯の学問と学問の方法を、私なりに自覚し、私のものとして定着させてくれたのは、女子大の10年間、とくにその間の社会調査研究と実習指導を通じてである。もちろん私一人ではできはずもなく、同僚、とくに共同研究者として、また、実習学生達の間につけて助手的にも下ささえをしてくれた向山耶幸さん、川上昌子

さん、その他そして何よりも、優秀で力もちであった学生の皆さんが多くいることだった。あの
実習室は亡くなった菅支那先生が英文学科と相談し、あっせんされて、私達に使用を許された部
屋であった。上記の調査実習スタッフの陣立てもそうであった。あれは木造2階建ての、正門を
入ってすぐ左の白いペンキのはげかかった建物であった。それは、当時文学部長の大原先生（英
文科）が「あれはユートピアといわれた部屋ですよ」とあるとき私にいったが、私にとってま
さにユートピアであり思い出の部屋だ。いまは建てかえられてないときいている。

昨年、12月13日、私は中央大学経済学部の私の担当する講義「社会保障論」の「最終講義」を、
4,500人は入る大きな教室で行った。これは公開講座で、学部長、同僚の諸先生はもちろん、学
生OB、他大学の研究者や社会運動の活動家など大ぜいの人が出てくれた。私は私の「社会保障
論」の基礎であるということで、「貧困＝社会調査とわたし」という題で、1時間45分ばかり話
をした。内容は、私の生涯の学問とその方法として、私の40年間の社会調査実践と日本の社会調
査史を語るという趣旨であった。その講義には、女子大のかつての私のゼミ学生であったいまや
中年の美しいお母さん達も、たくさん出てくれた。中央大学の同僚の先生が、ホーといって驚い
ていた。そのなかの2人のゼミ員の息子さんは、1人がいま中央大学法学部の学生であり、1人
は同じく商学部に在学とのことであった。まことにめぐりあわせということではある。この「最
終講義」は、1989年1月上旬号『賃金と社会保障』（1001号、労働旬報社）に、全文掲載されてい
るので、もし読んでいただければ大変光栄である。

というわけで、私は社会調査研究(労働と生活をめぐる)と社会福祉の検討を、甚だ不十分では
あるが、約束どおり生涯貫いてきたつもりである。もう1つは社会福祉の理論であるが、1987年、
私の編著ということで、私とともにやってきた多くの女子大や中央大学、その他北海道大学卒な
どの若い研究者の援助を得つつ、『生活分析から福祉へ』（「社会福祉選書」12、光生館）、を出版
した。もちろん内容十分なものとはいえないだろうが、その副題を「社会福祉の生活理論」と
したのは、私の以上に書いたようないきさつが、私の心の奥底にあるからである。

さて、なんだかっこいいようなことを書いたが、だからといって昨今私の心は晴れやらない
ものがある。何だかばかみたいにひとつことを来る日も来る日もやってこここまで来たが、これか
ら、さて、ということである。あとに残ったのは、年だけということかな、とも思う昨今である。
まことに真理は冷厳である。

（ えぐち えいいち：元本学教授
中央大学名誉教授 ）

日本女子大学での35年間 —初の講演と講師依頼のこと—

高 月 東 一

初の講演と講師依頼のこと

昭和26年のある日、社会福祉学科の科長をしておられた菅支那先生から突然の電話があり、桜楓会々員を対象に「世帯調査」について講演をしてほしいとの依頼があった。当時私は30歳によく手のとどいたばかりの若者であり、人様の前で講演をするなど一度も経験したこともなく、しかも聴き手の多くは、私より年上のおば様たちである。どうしたものかと思案して、帰宅後母に相談したところ、本学の1回生で桜楓会活動にも熱心であった母は、一も二もなく大賛成で、「結構なお話じゃないの、まだ時間もあるようだからしっかり勉強して恥かしくないようなお話をして下さいよ」と激励され、講演をお引き受けすることにした。

講演も無事終了、講師控室に通され、菅先生から「今日のお話は大変結構でしたよ」とおほめのお言葉を頂戴してホッとしたが、ついで菅先生から、「実は今の4年生で卒論に社会調査をやっている学生がいるけれど、適当な指導者がいませんので、先生指導していただけますか」という話があり、「私でよかったら…」ということでお引受けすることにした。すると、つづいて、「来年の4月から、社会調査の講義と実習を担当していただけないでしょうか」と話はさらにエスカレートしてきた。

さて、この話は、講演や卒論指導と違って、通年科目の講義ともなれば、自分一存では決められない。「勤務先の許可も必要ですので」ということで、保留にさせていただくことにした。

ところで、当時私の上司であった小山栄三先生(注1)は、たしか日本女子大学で、「社会調査・統計」と「社会問題」を教えているという話を聞いたことがあるが、この話は一体どうなっているんだろうな、といぶかしく思いながらも、数日後小山先生の意向を伺うことにした。

すると、小山先生は、にこやかな顔で、「実は、私も本務が忙しくなったので、社会調査の方はだれか適当な人に後をゆずろうと思っていた。戦後うちの役所の松宮一也さん(注2)が日本女子大で社会調査を教えていたが、他に移られたので、お鉢が私の方に廻ってきたが、今度は、こちらが忙しくなったので、後は君にやってもらうように話しておいた。よろしく頼むよ」というような話で、ことは意外に簡単に終わった。

後で思えば、これら一連のプロセスは、私の非常勤講師としての採用手続でもあったわけだ。だが、その当時は、これから定年までの35年間の長いおつきあいのスタートであるなどとは、夢思わなかったのである。

新任教師の頃

私の新任当時は、いわば戦後の民主化の時代で、戦前では、ほとんど顧みられなかった世論調査が、新聞、放送機関をはじめ、政府、地方自治体でも盛んに行われ、社会の関心を集めていた。

しかし、その方法論、すなわち、標本抽出法、質問紙作成法、面接技法、集計・分析法などの点では、アメリカ等先進諸国からみると、かなり遅れていたもので、それらの理論や技法の吸収、研究に急がしかった時代でもあった。

しかし、通年30回近い「社会調査」の授業を担当するとすると、単に調査の方法論だけではなく、近代的な社会調査への発展過程や、その背景についても体系的な講義案を作らねばならない。そこで、社会調査の発展史等についての文献にも目を通す必要があった。その結果、19世紀末から、20世紀初頭にかけて盛んになった実践的社会事業活動と社会調査との間には、相互に深い関係があり、両者の発展には、あたかも二人三脚の役割を果していることを知り勉強になった。(これらの点については、(注3)の私の小論を参考にご覧いただきたい。)ともあれ、当時の私にとって講義すること自体が、自分の勉強にもなったのである。

思い出に残る調査の数々

日本女子大学社会福祉学科での35年間の教師生活の中で、途中「社会心理学」、「経営管理論」などを担当したときもあったが、もっとも多く担当したのが「社会調査」であった。

このことから、「社会調査」の実習教育として行った調査や、卒業生の関係する団体の計画している調査のアドバイザー的立場で行った調査、あるいは、本学の教員の先生方との共同研究的調査といった様々なタイプの調査を手がけてきた。それらの中から思い出に残るいくつかの調査を紹介しておこう。

私の担当した最初の頃の「社会調査」教科目は、講義だけではなく、実習も含まれることになっていた。しかし、調査実習を行うためには、1週2時間の講義時間では不足し、勤務先や、夜分自宅にまで学生に来てもらい、報告書のまとめの指導を行うようなこともしばしばあった。その頃は、民放がぞくぞく開設された時期でもあったので、学生の関心もマス・コミの影響といった問題に集中し、調査実習にも「主婦とマス・コミュニケーション」というテーマが選ばれたりした。しかし調査実習費の裏付けはない。そこで、新聞社、NHK、民放連、調査研究機関などから寄付を求めて実施するなど、困難な状況の中で、学生もよくやった。今振り返ってみると、苦勞もあったが、むしろ若き日の忘れえぬ思い出の一駒になっている。当時の学生もまた同じ思いではなからうか。

次に印象に残っている調査は、1975年の国際婦人年に、国際大学婦人連盟（IFUW）主催の第18回国際会議が日本で開催される。その討議資料として、わが国の大学婦人協会では協会会員を対象に、「現代の家族生活—高等教育を受けた婦人の意識調査—」という題名の調査を計画していた。

この調査グループの中心的メンバーとして、本学社会福祉学科の卒業生新谷弘子さん（5回生）、橋本泰子さん（8回生）らが活躍していたが、この調査のアドバイザーとして、技術的指導をしてほしいという依頼があった。

それは、1973年の秋頃のことと記憶しているが、それから、たびかさなる企画会議の後実施の運びとなり、翌1974年3月30日に報告書ができあがった。その後報告書は英訳され、翌年の国際会議に討議資料として提供され、極めて有効であったという報告を受けている。

このような婦人の地位向上のための国際的婦人運動に、具体的な調査資料が用いられたのは画期的なことであったようだが、その後1980年の国際婦人年に世界会議が開催され、国連総会においても婦人差別撤廃条約が採択される運びとなった。

わが国も、この条約に署名し、その批准にむけ労働省を中心に国内体制づくりが進められ、昭和61年「男女機会均等法」が制定されることとなった。

当時、私は本務の方も忙しくなり、大変なものをお引き受けしたと、いささか後悔したりもしたが、今は、「微力ながら、お役に立ってよかった」と当時のことを回想している。

最後にもう一つ挙げておきたいのは、桜楓会設立80周年記念事業の一つとしての会員調査である。

この調査結果は、「桜楓会80年史」に掲載されているが、その「はじめに」の文に記されているごとく「80年の過去をふりかえることが、単なる郷愁に終わることなく、明日に向けての展望であることは当然ではあるが、その展望をより確かに、より豊かにするために、会員の総意を求めて…」この調査が計画されたわけである。

この調査以前にも、桜楓会の会員の動向調査は、会員名簿の改訂時などに、往復はがき等で行っていたようだが、その内容は、せいぜい結婚や家庭状況、就業経験の有無、桜楓会活動や本学に対する希望等にすぎなかった。その意味で、80周年記念事業の一環としての大々的会員調査は、画期的なものであったといえよう。

この調査の企画については、おもに本学の女子教育研究所が中心になって進められたが、その発足時に、女子教育研究所主事であった一番ヶ瀬康子先生と所員の山本和代先生からアドバイザーとしての協力を求められた。

この種の調査では、調査対象となった数千人の桜楓会会員の方達の熱意あるご協力に対して、まず感謝しなければならないが、それと同時に、このような比較的規模の大きい調査にあたっては、企画、実施、集計・分析、報告書作成などの各段階での担当者は、それぞれの分担について十分責任をもつと同時に、関連する他領域との協力が極めて大切である。その意味で、本調査においては、前記の両先生のほか、女子教育研究所の落合先生、また集計段階では、本学の計算研究所の二宮先生らが中心メンバーとして活躍され、その他約20名の桜楓会員の方々の献身的なボランティア活動によって完成されたことは、特筆すべきことといわねばなるまい。

この調査にみられるように、平素はあまり交渉のない他学部、他学科の人達が一堂に会し、共同研究的調査を実施することは、調査を通じて学内における We-feeling を高めるとともに、調査に限らず、今後の学術研究において求められる学際的研究にはぜひ必要なことであると思う。

(たかつき とういち：東京工芸大学教授)

(注1) 小山栄三氏(故人)

東京大学文学部社会学科卒

内閣審議室世論調査担当

国立世論調査所長を経て、立教大学教授、社会学部長。

(財)日本世論調査協会会長、(社)広報協会会長等をつとめた。

(調査関係著書)

輿論調査概要(時事通信社刊)昭和21年

(注2) 松宮一也氏(故人)

コロンビア大学出身

内閣審議室世論調査担当

用紙割当委員会事務局長を経て、日本リーダーズ・ダイジェスト社広告部長となる。

(調査関係著書)

面接調査法(福村書店刊)昭和25年。

※松宮氏のあと、南博氏が一時「社会調査」を担当したが、間もなく、一ツ橋大学の方へ移られた。

(注3) 松本武子編著「日本のケースワーク」

第3章動向D. 関連3

「社会福祉の実践活動と社会調査」

担当執筆 高月東一(家政教育社版)昭和53年

社会福祉学科23年間の思い出

田宮良子

第二次大戦（大東亜戦争ともいった）末期の混乱のさなか昭和20年4月、日本女子大学家政科管理科に入学しましたが、空襲が激しく地方からの学友は親元に帰され、東京在住生は通学しました。授業はほとんど行われず防空訓練・日本女子大学考案のターバン、エプロンモンペの作り方を習い、また日本女子大学生としての心構えについて、成瀬仁蔵先生の教えについて、大学で何を学ぶべきか、将来の目標、などについて井上秀校長先生や研究室の先生方、上級生より講話をきき、縦の会・横の会で盛んにディスカッションが行なわれました。1年生は9月に山形県に疎開することになり、その準備中の8月に終戦、10月に正式の入学式が行われ、アメリカ占領下の民主的教育が始まりました。敗戦の痛手の上、まわりは焼野原、私たちと同一年ぐらいの女性が街頭に立っていたのは身につまされる思いでした。成城学園前からの通学途上、車内は椅子席にも何人もの人が立ち、車輛と車輛の連結された間にも摺まって乗る異常さでした。

2年生になり、運動会が復活し開校以来初めて公開されると大さざぎされ、正門横の塀には、男子学生が鈴なりにぶら下って見物していました。初めて応援団が結成され、伝統の各科のカラーで応援を競いあい、私は管理科の応援団長ということで、ブルマー姿にミドリ色の鉢巻き、両手に日の丸の扇子をもち、フレ！フレ！ミドリー！とかけ声をかけました。恥かしさも忘れ一生懸命応援した甲斐あって管理科は優勝しました。忘れられない青春時代の「よろこびと感激」でした。この運動会もほとんど毎年行われ「体育の日」が祝日と定められた年に西生田で幼稚園から大学までの合同運動会が行われたのが最後となりました。

もう一つ開校以来初めて、時代の波というか2年生の夏休みにアルバイトを希望する学生が殺到しましたが、学校側に対処する部署がありませんでした。学生自治会福祉系の総務をしていた私は、これこそ学生の手で開拓しようと福祉系の総会にかけ自治会の承認と学校側の承諾を得て、まず桜楓会からの紹介や口コミで卒業生のご主人様方の勤務先へお邪魔し、主旨をお話し、お引受けいただきました。何と一夏に延べ700人～800人ぐらいがアルバイトをしました。福祉係で分担を決め夏休み期間中アルバイト先を訪問し、不自由はないか、会社側に迷惑をかけていないかを見廻って歩きました。日本女子大学始まって以来のこととて、新聞、ラジオにとり上げられ、学校の許可を得て取材にも数回出席いたしました。このことを契機にアルバイト学生がふえ、25年頃から事務局の中で学園生活部（厚生課の前身）が担当するようになったと思います。

さて昭和23年、卒業と同時に助手となり菅支那先生に「1年下級生」のリーダーになるよう説得され、自信なく引き受けてから20年間在職しました。3年間は「学生指導部」と兼担。「大学紛争」の賑やかな数年間でした。以後は「学生指導部」の一員として機構改革され「学生部」「課外活動の係」「学生課」と勤務21年目になります。

昭和23年に「新制大学」に昇格した新制1回生は5年間在籍、私にとって最初に担当したクラ

スですので印象深く思っております。毎週木曜日の3、4時限目が実践倫理、午後はクラス会でした。菅先生はクラス会をたいへん大事になさり公用以外は滅多に休まれず、休まれる時は、私が先生のお許しを得て、学生の希望する新宿御苑で楽しい討論会をもちました。また学生から引率を頼まれ研究室会議で許可を得、奥多摩、熱川温泉へ1泊2日の小旅行もさせていただきました。夏には軽井沢の修養会についていたり、3年生主催の目白祭の展示準備に徹夜で過ごしたことも懐しく思い出されます。

研究室では常に学科の充実をはかるためカリキュラムの見直しの会議がもたれました。実践の現場がもてる研究をエンジョイしたいと卒業生に相談され、何度か会を重ねました。新制1回生が4年生の時、社会福祉学科セツルメント基金募集のための第1回目の催物が開かれました。以来、4年生の卒業前の行事となり、下級生に引きつがれていきました。音楽会、日本舞踊、演劇などが行なわれました。足立区興野町にセツルメントを開設、図書のを各所にお願ひし苦労したこともありました。今日まで学生の実習の場として地域の方々から感謝されつつ利用されていることを誇りに思っております。

昭和29年には研究室の先生方の並々ならぬご研究の結果、機関誌「社会福祉第1号」が刊行されました。33年には、卒業生及び在学生の長年の念願であった文学部への移行、よろこびとともに、またカリキュラムの見直しへと大変な努力をなさって下さいました。素晴らしい先生方のお教えを受け、私も社会福祉学科に学んだ者は、本当に幸せであると痛感しております。

こういうときに結婚、毎年の子供の誕生で、これでは！と自己を知り、大好きな社会福祉学科の縁の下の力もちになれたらと決心しました。社会福祉学科のすばらしい土台をしっかりと整理しておかなければと、資料集めに、その整理と同じく助手の柴田(粟生)英子さんと没頭しました。助手の仕事は、社会福祉学科の場合、対外的なことが多く、人手のいる学科だと思います。私はそちらを引受けようと努力しました。次々に助手に残られる方々の雑用を少しでも引受け皆さんには研究をしていただきたいと願いました。子供も6人、一生懸命に母の力を得て育てました。最近になって、卒業25年、30年の会に招待を受け、私たちの学生時代のアダナが「カンガルー」「赤鬼」だったときかされ、なるほどびったしの表現と感心し、うれしく思いました。

昭和63年の創立記念式には永年勤続40年の表彰を受けました。もう40年経ってしまったのかと驚いております。今日までの人生の2/3を日本女子大学の中で過ごさせていただきましたことを深く感謝いたしております。これも「社会福祉学科」で諸先生方のお教えを受け、上級生の方がたのご指導や下級生の方々の活躍のおかげと、社会福祉学科に学べた幸せと素晴らしさを幾度も感謝いたします。「社会福祉学科」の将来の構想の実現と発展をお祈りしております。卒業生の1人1人が社会福祉学科で学んだカナメを社会へ、家庭へ、そして世界の人びとへ還元していくことが、亡き恩師の先生方や研究室へのご恩に報いることだと思います。心だけは、いまでも研究室にいるつもりで、いつも学生課から発展を願っております。日本女子大学創立100周年記念までは、元気でいられるよう健康に留意して、皆さんとの再会の約束を守れるよう頑張りたいと思っております。

(たみや りゅうこ：本学職員)

太平洋戦争の敗戦前後の学生生活

吉田 栄

私が日本女子大学校家政学部第三類に入学したのは戦争末期近くの昭和18年であった。一番ケ瀬康子教授、正田弥生附属中学校々長と同級という榮譽を与えられている。この前年、イギリスではベバリッジ報告書が出たわけであり、私も新聞の記事を覚えている。当時の敵国のことであり、新聞紙面も窮屈なときであったが、いくぶんの解説を加えた記事ではなかったかと思う。後、生江孝之先生の社会事業論のなかでニュージーランドの社会保障のことをきき、先生の著書も読んでみて、一層記憶が鮮明になったのであろう。

社会事業学部として創設された学科は昭和初期の社会主義弾圧の嵐の中で家政学部に所属がえをし、第三類となって講義内容も家政学系半分、社会事業系半分となった。修学年限も3年間となった。他学科はみな4年なので肩身の狭い思いもした。入学者の志向は家政学志向と社会事業志向と半々ぐらいであったらうか。社会事業学部の大先輩の方々からは頼りない学生達と思われたのではないか。いろいろ、ご批判を受けることが多かった。講義としては当時、家政学と社会事業関係の学問とが融合、統合されていない時代で…現在では「学際」というような考え方があり、幅広くとらえることに、かなり馴れができていていると思うが……学生としてはとまどいがあったといえよう。現在、自分で教壇に立つ身となり、相手方に理解される形で語ることの重要さを強く感じるが、それでも学生のおかれた立場を考えない言行が多いことだろうと反省する。

入学者は40名、なかに多くの朝鮮半島からの学生、中国大陸からの留学生がおられた。それらの方々の方々の国家観、社会観はとてもしっかりした方が多く、私はたいへん感心した。

入学後半年ぐらいは学生の服装、娯楽など現在と本質的には差がないのんびりしたもので、大いに青春を楽しんでいたが、後半、男子の学徒出陣が始まり、にわかには緊張が増した。昭和19年、2年次になると全員、兵器工場に動員され、大学には週1回しか行けなくなり、たいへんショックであった。しかし私個人にとって「物」の生産過程に身をおき、それを自らの仕事とする人と生活をともにすることに興味を感じた面がある。現在の学生は実習で現場体験をもち、アルバイトで働く経験ももつが、ベアトリス・ウェッブではないが、底辺の肉体労働者の体験には意味があると思った。

昭和20年、敗戦後の秋から大学に戻り、講義が再開された。半年後卒業したが、後々、故菅支那先生から、「あなたたちは少ししか勉強してないから」とあわれみの言葉をいただいたが、本当にそのとおりだった。「国家論」に新鮮な驚きを感じ、卒論として級友の大部分と救護法の実態調査を行った。老人、母子家庭等を訪問し、それぞれたくましく生きていられる姿に感動を覚えたが、しかし、当時の救護法がもっとも困窮している人びとへの対応を果してはいなかったのではないかとも思われる。実態というものはいつもなかなかみえないものである。

21年3月卒業した。この間に三類は管理科と改編され、戦争下の勤労管理を課題としたが、敗

戦とともに、社会福祉学科となり、創設時に戻った。しかし、家政学部所属は変らなかったのが学生のとまどいは残ったようであった。

22年より、研究室の手伝いとして学科の運営にかかわらせていただくことになった。敗戦後の社会福祉はアメリカ軍政部の指導によっていた。一方でアメリカによって紹介された治療的ケースワークを中心とするアメリカ社会事業のとり入れと、一方では新しい社会福祉制度、社会保障制度、後には福祉国家の創建に向けて自覚、志向があり、日本はそれを融合、統合するだけの経験も理論ももっていなかった。当時の日本の社会福祉は混とんとしていたといえよう。学生たちもとまどいつつも、子ども会活動を中心とする社会活動の実践や、文化活動にエネルギーを昇華させていった。このなかから今日の社会福祉学科のすばらしい先輩たちが躍りでてゆき、それぞれの世界で頂点を極めている方々となられたのである。

(よしだ さかえ：宮城学院女子短期大学教授)

大学紛争の思いと新学部へのぞむ

吉澤英子

社会福祉学科50年史には、ひじょうに淡々と記述されているが、私にとって、当時の大学紛争は、生涯忘れ難い人間的ショックをうけた。換言すれば、それは人生で味わわなくてもよい体験、否、味わってはいけないうえでもいえる体験である。したがって思い出(甘いもの)とは言い難い。それは、それまで信じて疑わなかった人間存在に対する不信感を嫌というほど味わわされたとも言えようか。人間関係には、ある意味の逃げ場が必要である。それがまったくなかったあの当時の思いは、いまでも鮮明に残っている。約20年を経た今日、その過程をふりかえり、感無情である。そんな気持ちもちつつ現在もなお、講義をしている私である。

この度、新しい時代をリードしようとする新学部、新学科の発足は、素晴らしいことである。その学科のカリキュラム内容、教授陣の配置はよくわからないが、「真」から、そして「内」なるエネルギーのほとばしる人間教育を切に願いたい思いにかられている。

私は、はからずも他大学に、現場に、研究所などに籍をおいてきたし、現在もなお継続中である。そのささやかな体験から少々勝手を言うことをお許しいただきたい。

社会福祉は、どうしても理論だけではダメ、制度政策論のみでもダメ、ましてや批判の「学」だからといって、結果をどうするかなしの批判のみでもダメ。現実を直視し、多角的視点をもって分析を試み、その相関、組合せのもとに対応計画をたて、かつ実践をする。そして科学的評価基準を打出していかなければならない。この一連の流れをこなしうる能力がこれからの福祉を担う者に必要と思われる。それは当然のことと言ってしまうまでもあるが、実はなかなか教育、研究の結果としてあらわれてこないのが現実でもある。社会福祉を志すひとりの学生の内に秘めている素晴らしい素地を引出し、その将来にむかって、方向づけの契機をつくる豊かな学科の雰囲気を出してほしい。環境は、人間形成に大きな要素の一つである。学生と教師の不断のコミュニケーション、相互刺戟による教育、研究の場を期待したい。

70周年といえは人間にとっては古稀の祝いの年でもある。いわば円熟期である。このときにスタートする新学科は、円熟したスタッフ陣によって推進されることを、一卒業生として、もとの一スタッフとして心より願ってやまないものである。

最後に、大学紛争当時、研究室の決意として学生に伝えた文中に、フランスの詩人アラゴンの言葉を引用している。

「教えることは希望をともに語ることであり、学ぶことは誠実を胸にきざむことである」この言葉、その思いを思いおこし、良心を大学に期待したアラゴンの心情を読みとることとともに学科としてそれをぜひ実現して頂きたいものである。

(よしざわ えいこ：大正大学教授)

社会事業方法の理解

—実習の難しさ—

深 沢 里 子

昨年、同志社の島田啓一郎先生、琉球大学の我喜屋良一先生とお会いする機会があった。そのとき、以前同志社で教鞭を取っておられたドロシイ・デッソウ先生（Dorothy Dessaw）の思い出話がでた。先生のソーシャルワークの講義は学生が理解できず、面白くなく不評であったが、卒業してから、わかるようになり、実際に頭に浮かぶのは、必ずデッソウ先生の講義の断片であると学生達が話していた由、特に我喜屋先生は、沖縄が本土復帰する以前に留学生として、同志社で、デッソウ先生の講義をおききになっておられるので、その実感をこめてのお話は印象深かった。そして私が行った講演について、「デッソウ先生の話を書いているようであった」と評しておられた。我喜屋先生が、デッソウ先生には、及ぶべくもない私に、時代を超えて、また国籍を超えて、ソーシャルワーカーとしての同一性（Identity）を、感じとって下さったことを、大変嬉しく、その評を受けとったものである。

私は学生するとき、大島たね先生から、社会事業方法論（ケースワーク）の講義をうけた。大島先生は、同志社女専を卒業され、アメリカで学ばれ、昭和10年代に、聖ルカ国際病院の社会事業部で、村松常雄先生等とご一緒に働いた経験をおもちで、当時、アメリカ軍や立教大学にも関係しておられたようであった。その大島先生の講義が面白くなく、先生からの問いかけに、学生が反応できず、しばしば先生から慨歎の言葉をいただいた。いまもお壇上で困り果てた表情をなさっている先生のお顔が目に浮かぶのみで、講義の内容は頭に残っていない。

デッソウ先生、大島先生のような臨床家の講義がなぜ学生に理解されなかったのだろうか？それは教える側の問題であったのか？終戦直後の時代的背景をその要因にあげるべきなだろうか。日本の風土に、もともと馴染みにくいことを教えていたのだろうか？と最近よく考える。

私の学生時代のカリキュラムはいまほど整えられていなかったが、想い出すままにあげれば、社会調査：小山栄一先生、法律：我妻栄先生、経済学：高橋誠一郎先生、社会心理：南博先生、精神衛生：村松常雄先生という高名なメンバーが講義して下さった。内容の理解は不十分であっても、知的好奇心、研究欲は、刺激されたものである。社会科学の明快な定義、理論的枠組のキッチリとした内容は、曖昧なところがなかったので、学生もひきつけられていったのであろう。

そのなかにあって、「社会福祉方法論」の内容は、「わかりきったこと」「自明なこと」であり事例研究も「結果が悪いのに」「問題が解決していないのに、あれで良いのだろうか」と、メデタシ、メデタシに終わらないケースに、いったい何を援助するのだろうかと思ったものである。いま考えれば、恥ずかしい限りであるが、講座の内容も不十分であり、この程度の理解が普通であったように思う。

ケースワークをはじめとする社会福祉方法論的技法は、現場、臨床のなかからでてきたものであり、体験のなかで構築されたものであろう。その体験なしに理解は難しい。現場実習の意義

もそこにある。社会福祉実践が、まず対象が“人”であり、その“人”に接するのをもまた人間であり、そこに関係が生じ、その関係のなかで援助が行われる。その関係は必ずしも良いものだけではない。関係の数だけ異なるであろう。関係という、このことを経験するのも現場実習であろう。方法論を軽視し、現場実習も十分行わず、後年、ソーシャルワーカーになり、学生の実習指導を行い、また講義もさせていただいていることは、皮肉なことである。

私は自分自身ソーシャルワーカーとしての軌跡をふり返ってみると、カリキュラムが整備されず幅広くいろいろの講義がうけられたこと、技術偏重でなかったことが、逆説的に聞こえるかも知れないが、私にとっては良かったようにも思うのである。

昨今、社会福祉の分野での身分法制定の動きと関連して、実習が義務づけられるようになり、大変結構なことである。

社会福祉教育に実習は欠かせないことはいうまでもない。が、忘れてはならないことは、実習のなかで仕事を体験するのではなく、自分自身を知ることである。そのためには、体験したことを大学の指導者にフィードバックし、また現場の指導者にもスーパービジョンを受ける体制が作られなければなるまい。やりっぱなしの実習は、現場馴れした情報通になっても、ソーシャルワーカーとしての、同一性を得る訓練にはならないように思われてならない。社会福祉の分野で働くための土台となる知識を幅広く学生に修得させたいものである。それがないと、技術の本質についての理解ができず、小手先の方法の経験に終わってしまい、仏作って魂入れずになってしまうようである。社会福祉教育、実習指導は、難しいものである。

ふかざわ さとこ：聖路加国際病院
医療社会事業科長